

「ラー麦」における緩効性肥料と葉色診断を活用した追肥回数の削減

筑後分場、豊前分場、農産部、生産環境部

1 背景、目的

ラーメン用小麦「ラー麦」（品種名：「ちくしW2号」）は、県のブランド品種として普及拡大を進めています。ラーメン用小麦に求められるタンパク質含有率12%以上を確保するために穂揃期追肥を加えた3回の追肥を行っています。しかし、穂揃期追肥の労力負担が大きく、省力化が求められているところです。

そこで、1回目の追肥に緩効性肥料を用いた施肥と葉色診断を活用した省力施肥技術を開発しました。

2 成果の内容、特徴

- 1) 1月下旬に専用の緩効性肥料（商品名「硬質小麦専用追肥3004」）を窒素成分で10a当たり12kg施用（以下、1追緩効性肥料施肥）することにより、収量は3回追肥を行う分施体系と同等で12%以上のタンパク質含有率を確保でき、2回目以降の追肥回数を削減できます（図1）。
- 2) 1追緩効性肥料施肥の1月中旬施用は1月下旬施用に比べて緩効性肥料の溶出が早く、タンパク質含有率が低下しやすくなります（図2）。
- 3) 3月上旬の葉色（SPAD値：展開第2葉）が44以下の場合には、タンパク質含有率が12%以下となりやすいため（図3）、穂揃期追肥で10a当たり窒素成分2kgを補正施用することにより12%以上を確保できます。

3 主要なデータ・画像など

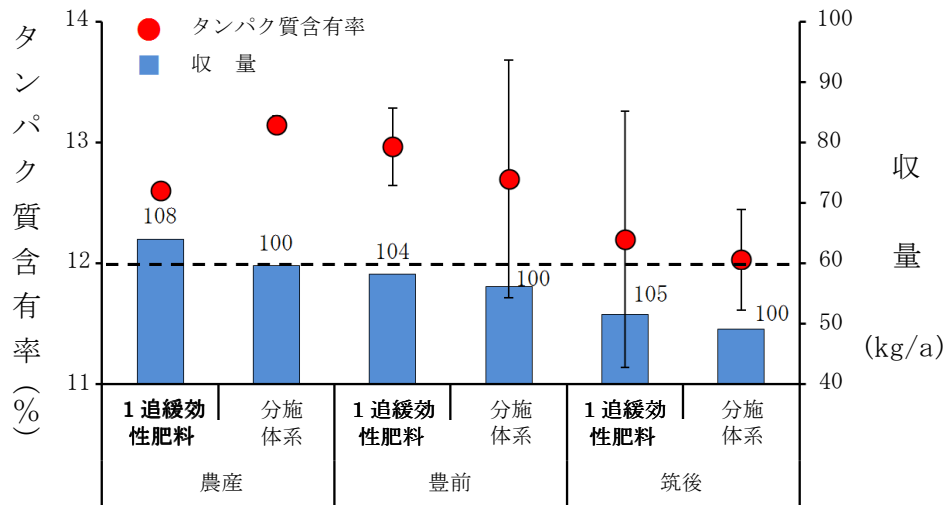


図1 1 追緩効性肥料施肥のタンパク質含有率、収量

- 注) 1. 施肥体系(窒素施肥量 kg/10a)
 1 追緩効性肥料施肥：5+12(基肥+1 追)
 分施肥体系：5+4+2+5(基肥+1 追+2 追+穂揃期追肥)
 2. 農産は25～26年播、豊前および筑後は24～26年播の平均値。
 3. 播種時期は11月下旬、1 追の施用時期は1月下旬。
 4. 縦棒は標準偏差。収量の数値は、分施肥体系を100とした比率。

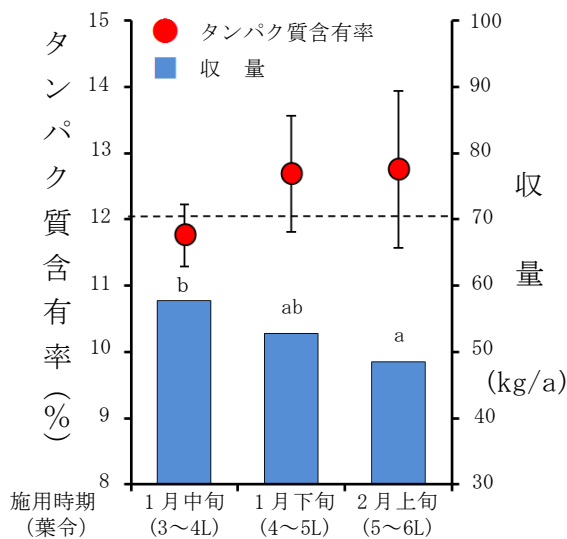


図2 1 追緩効性肥料施肥の施用適期 (25～26年播：筑後分場)

- 注) 1. 窒素施肥量(kg/10a)は、5+12(基肥+1 追)。
 2. 異英文字間には5%水準で有意差あり。縦棒は標準偏差。

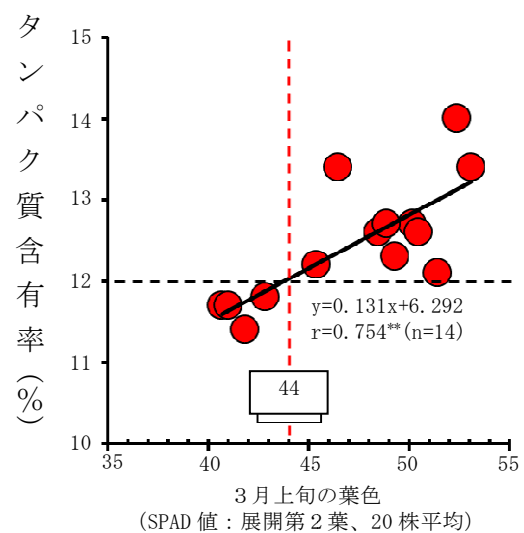


図3 1 追緩効性肥料施肥のタンパク質含有率12%以上を確保するための3月上旬の葉色値

- 注) 1. 24～26年播における1月下旬～2月上旬追肥のデータ使用(筑後分場および県内各地)。
 2. **は1%水準で有意。